

牧場経営の夢をかなえた 酪農ヘルパーたち



第3集

「牧場経営の夢をかなえた酪農ヘルパーたち」

第3集の刊行にあたって

「将来酪農に携わってみたい」「酪農家になりたい」と思っている方は大勢いると思います。もちろん酪農に最も近いところで仕事をしている「酪農ヘルパー」のなかにもいますし、なかには将来酪農家になる目的で「酪農ヘルパー」の仕事についている方もいます。

一方、日本の酪農家戸数の推移を見えますと、最大ピーク時の417千戸(昭和38年)から、直近では24千戸と大幅に減少しています。

さらには、酪農家の高齢化の進展や後継者不在などにより今後も減少傾向が続くものと予想されています。

そのため、酪農家戸数の減少に歯止めをかけ、生乳の生産基盤を確保するためには、牧場経営を希望する方々に新規参入をしてもらうのが非常に効果的なのですが、いざ取り組もうと思っても、就農情報の不足、経営技術の習得、多額の初期投資に向けた資金確保、地域での協力関係の構築など多くのハードルがあり、そう簡単には第一歩を踏み出せないでいる方も大勢いるのではないかと思います。

その一方で、これら多くのハードルを乗り越えて「牧場経営の夢」をかなえた方々がいます。もちろん就農までの道筋はそれぞれ異なりますが、本書では酪農家になるという「夢」をかなえた事例として、近野牧場(北海道美深町)、梶本牧場(岩手県八幡平市)、小林牧場(群馬県太田市)、武藤牧場(北海道浜中町)、野間牧場(北海道浜中町)を紹介しています。これらの新規就農希望者が実際に歩んだ道筋の記事をお読みいただくなかで、「酪農家になりたい」とい

う「夢」をかなえるための第一歩を踏み出す一助として、本書がお役に立てれば幸いです。

終わりに、本書を刊行するにあたって、お忙しいなかにもかかわらずご協力いただいた酪農家、農協、支援団体等の皆様に厚く御礼申し上げます。

。 * * *

最近では、これ以上の酪農家の減少は、地域産業の衰退ひいては地域活力の喪失に繋がりがねないとして、このことを地域全体に係わる重要な課題としてとりあげ、酪農家、農協、関連団体、行政などが一体となって新規参入者への支援をおこなっているところがみられるようになりました。

本書のなかでも一部取り上げていますが、後継者不在の酪農家が協力し、農協や町のバックアップも受けながら新規就農支援をおこなう「R&R おんねない」の取組や農協が中心となって研修牧場、酪農ヘルパー利用組合、行政と連携しつつ就農支援をおこなう浜中町農協の取組などです。

いづれにしてもこのような取組の特徴は、地域全体の協力体制が整っていることもありますが、地域の考えや狙いを明確におりこんだ新規就農のための行程表が用意されていることです。

もし、このような取組に興味を湧きましたら(社)酪農ヘルパー全国協会に是非お問い合わせください。

平成 22 年 3 月

社団法人 酪農ヘルパー全国協会



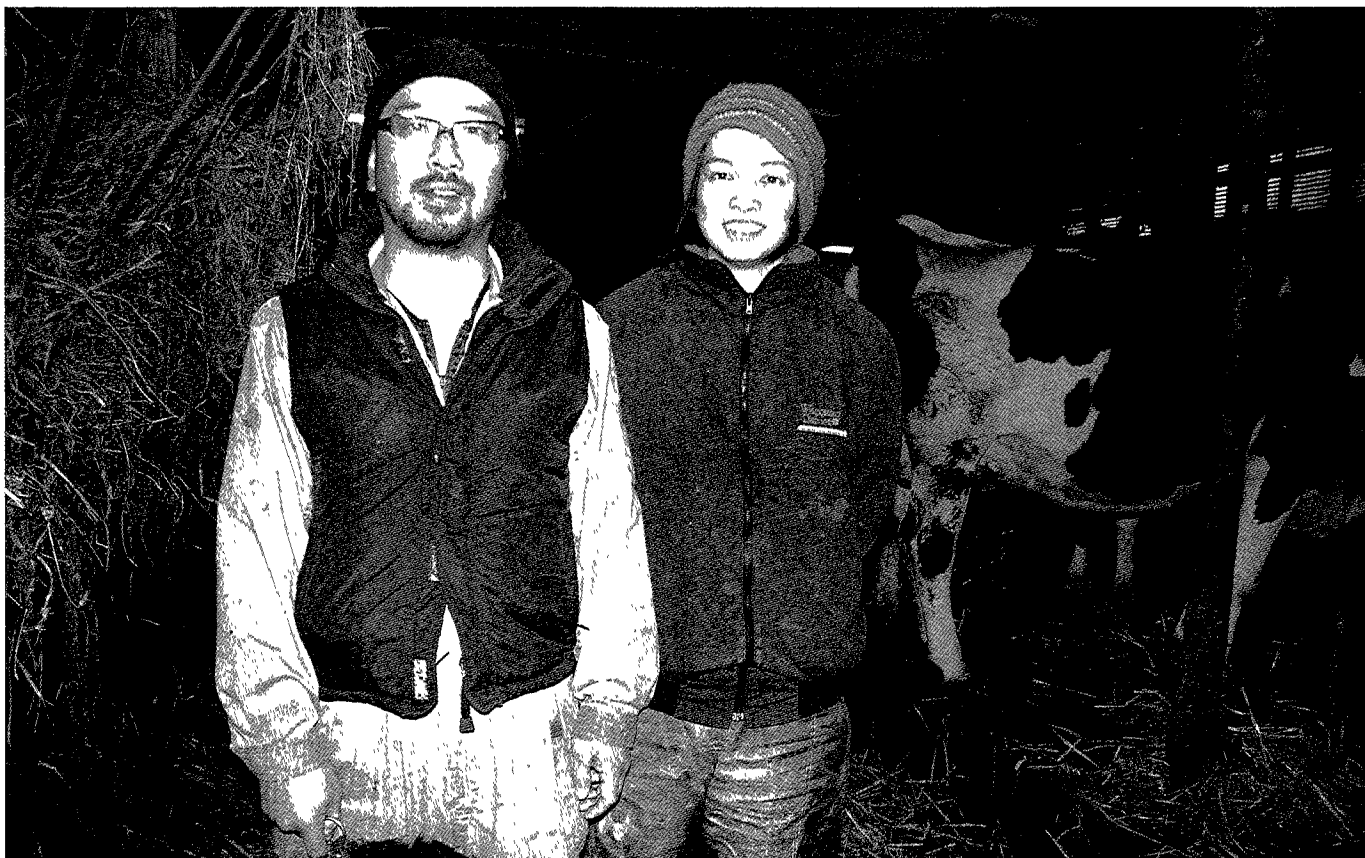
目 次

第3集の刊行にあたって	1
目 次	2
牧場経営の夢をかなえた酪農ヘルパーたち	
* チャンスは身近に！ ラジオが教えた就農先 近野剛・真奈美さん（北海道美深町恩根内）	3
* TMR センター活用で新規就農を実現 酪農ヘルパーの梶本夫妻の事例（岩手県八幡平市）	5
* 普通のOLから、酪農ヘルパーで人生を変える 群馬県の小林佳奈子さん酪農の夢実現	7
* 府県のサラリーマンの息子が酪農に憧れた 武藤智昭・奈知子さん（北海道浜中町厚陽）	9
* 酪農は面白い！ やればやるほどウシが応えてくれる 野間一輝・直美牧場（北海道浜中町円朱別）	11
酪農経営継承データベース登録案内	13
表紙写真について	14



チャンスは身近に！ ラジオが教えた就農先。

◆近野剛・真奈美さん（北海道美深町恩根内）



近野剛・真奈美さん夫妻

秋 田県出身の近野剛さん（34）は幼い頃から動物が好きなこともあり、動物に係わる仕事をしたいと動物飼育専門学校に進学した。在学中に牧場実習があり、実習先で酪農に出会いその魅力と面白さを知った。そして、何とか酪農家になりたいと、卒業後は道内の酪農ヘルパーとして勤務し就農に備えた。妻の真奈美さん（33）は神戸生まれだが自然が大好きな娘だった。高校卒業後は銀行に勤めていたが憧れの北海道で家畜や自然に触れる仕事をしたいと、新冠の牧場で酪農体験実習に飛び込む。近野さんと知り合ったのは米国の酪農実習での実習生セミナーの場であった。お互いの酪農への夢を語り合い、新規就農を確認。やがて帰国して北海道で結婚、夫婦共々道内の牧場で働きながら就農先を探した。

●「R&Rおんねない」のユニークな取り組みを知る

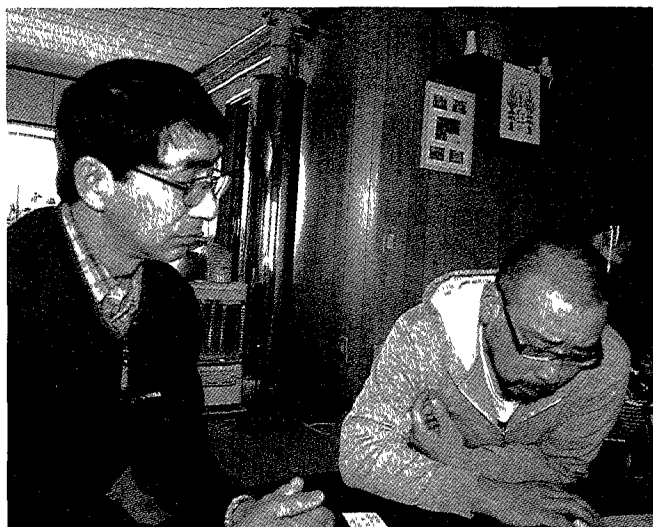
道内各地を探したが条件に合うような地域や牧場は見つからなかった。しかし、05年秋のある日、酪農家での作業中にたまたま聞いたラジオニュースに惹かれた。それは美深町の「R&Rおんねない」での新規就農者を受け入れるニュースだった。直感的にこの「R&Rおんねない」の活動は素晴らしいと思い、夫婦で美深町を訪問。新規就農者が自立・成功出来るまで育てる「R&Rおんねない」の受け入れの考え方や、農協等の支援組織が熱心に指導してくれるのが安心できて気に入ったという。「R&Rおんねない」は美深町恩根内地域の酪農家8戸が地域の酪農家の担い手を居抜き継承で確保しようと平成15年5月に設立された。取り組みの契機は地域の酪農家戸数の減少が見込まれ、このままでは地域の維持が困難になるとして、外部から新

たな担い手を導入するため、移譲予定の地域の酪農家が集团的、計画的に経験や技術、知識等を教えて新規就農を円滑に進める仕組みで、全国的にもユニークな就農受け入れ組織である。

1年目は会員酪農家で1～2ヶ月単位で酪農技術や生活研修を行い地域や酪農家とのコミュニケーションを学ぶ。2年目からは経営継承先の牧場から1年間にわたって実践的な研修を受ける。3年目になり新規就農者として居抜き継承として住宅や牛舎。施設、家畜、機械、草地等をそのまま継承する方式である。冬期間の農閑期には支援機関による座学を中心にした研修も実施される。また、「R&Rおんねない」会員には経営移譲予定の酪農家だけではなく、新規就農酪農家も会員となる。その為新たな研修生の受け入れや、就農後の経営・作業・保証等でも全員で支えており、地域の交流や活動にも積極的に参加している。

● 09年11月、念願の経営継承が実現

近野剛・真奈美さん夫妻は06年に長男の森汰ちゃん(4)を連れて酪農実習に入った。翌年からは就農先の森口牧場での実践研修を開始したが、真奈美さんはその時に次男の幹太ちゃん(1.6ヶ月)を出産して大変だった。森口牧場の当時の経営規模は乳用牛53頭(経産牛27頭)、草地面積27㌦だった。09年11月に念願の経営継承が実現して近野剛・真奈美牧場が発足した(表紙写真)。居抜きによる営農開始では北海道農業開発公社による「農場リース事業」を活用。一定期間(5年以内)の貸し付け後、土地や家畜、農機具、施設等を譲渡する方式で大変助かっている。しかし、なるべく早く償還したいとのこと、放牧酪農のため



近野さんとR&Rおんねない服部さん(写真左)

草地や飼養頭数の規模拡大を行った。10年2月では合計79頭(搾乳牛頭数47頭、育成牛32頭)、草地面積は42㌦に拡大、生乳生産は300㍑と低めに設定した。

牛舎は古い継ぎ足しのつなぎ牛舎でパイプライン搾乳だ。近野剛さんの新たな経営は今春から開始されるが、近野さんは「飼料費や管理労力を軽減するために牛に優しい放牧酪農を開始したい。10年近く酪農に関わる仕事をしてきたが、自信過剰にならず、多くの人の意見を聞いて堅実経営をやりたい。また、出合いを大切にして、地域の方々と助け合って頑張りたい」と語る。

新規に就農を目指す酪農ヘルパーに対して「酪農ヘルパーで動ける時に積極的に各地を動いて探すこと、なるべく沢山の候補地を見て、ここと思ったら必死になることだ。そして、早く地域に溶け込むことが大事」と語っている。



近野牧場

TMR センター活用で 新規就農を実現。

◆酪農ヘルパーの梶本夫妻の事例(岩手県八幡平市)

●子供の頃から夢は酪農家

岩手県八幡平市で念願の酪農経営を果たした梶本希(のぞみ)・美香さん夫妻(ともに28歳)は岩手農大の同級生。梶本さんは鹿児島県生まれで地元(旧松尾村)育ち、子供の頃は自宅の周辺は酪農家ばかりで、酪農家が運転する外国製の大型トラクターに憧れた。父親の範生さん(57歳)は当時地元の大型牧場の従業員として働いていたので、将来は父親のように乳牛に関わる仕事をしたい、酪農家になりたいと夢みたといい。夢を実現すべく岩手県立農業大学校へ進学。在学中に酪農家になるため大型農機等の各種免許を取得して就農に備えた。同級生で妻となる美香さんと知り合い酪農家になる夢と結婚を約束。卒業後は母校の実習助手として3年間勤務。その間は妻の美香さんは県内の胆江地区酪農ヘルパー利用組合に、酪農ヘルパーとして勤務。平成17年、地元で岩手山麓デイルーサービスが稼働

することを聞き、就農チャンスがあるとして、実習助手を退職して郷里の西根地区酪農ヘルパー利用組合に就業して、専任酪農ヘルパーとして地元で活躍しながら新規就農先を探したという。

西根地区酪農ヘルパー利用組合は平成4年8月に発足、専任ヘルパー3名、サブヘルパー5名で定期利用25戸、臨時利用25戸を対象に八幡平市(旧西根町、旧安代町、旧松尾村)を活動範囲としている。出役実績では平成21年度定期利用404回、臨時利用34回と地域の酪農家のセーフティネット機能を果たしている。

●酪農家になる夢、叶う

また、酪農ヘルパーに就業したのは、様々な酪農家の飼養管理を知ることができ、さらには経営環境等の情報も入手し易いこともあったからだ。

平成19年4月、20頭規模の畜舎を賃借することで、飼



梶本希(のぞみ)・美香さん夫妻と創喜ちゃん(8ヵ月)

料畑が無いまま新規酪農家として酪農を開始。

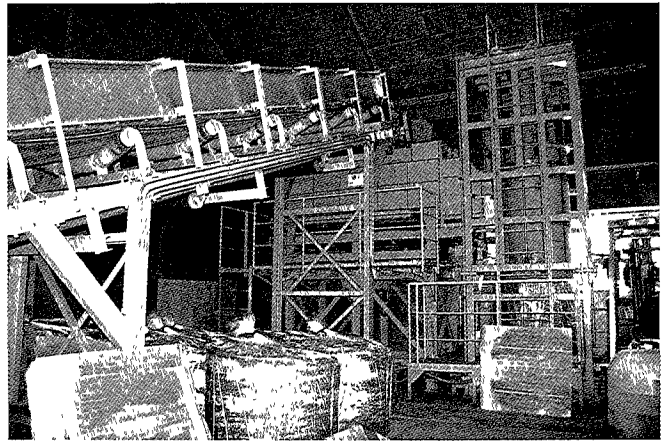
賃借した畜舎は古い牛舎なので働きやすくするため自己資金を投入して改装したという。平成18年に妻の美香さんと結婚、専任酪農ヘルパーを兼業しながら借牛舎で新規酪農家として、搾乳牛12頭でスタートした。

その頃は父親の範生さんも地元の別の酪農ヘルパー利用組合の専任ヘルパーとして働きながら、ルーデンス農場を開設。4haの農場で平飼いの採卵養鶏を開始していた。現在は息子の牧場の育成牛を預かり管理している。特記すべきは、12頭の搾乳牛の乳量の乳代収入では経営拡大資金が貯まらないとして、知人にアイスクリームを委託加工して試験販売していることだ。

八幡平は観光地であり、観光客も多いので季節限定のアイスクリームのテスト販売だが風味が良いと評判である。「120mlで350円と他の競合商品よりも割高だが、ミルク風味が良いと客が言うので、通信販売など販売方法も考えたい。将来的には牛乳と平飼鶏卵に付加価値を付けた商品も考えたい(範生さん談)」

また、昨年10月には酪農ヘルパー全国協会からNZ海外研修旅行の派遣(報告は酪農ヘルパー情報誌65号掲載)に行ってきた。NZは学生時代から憧れの国であり、放牧酪農に興味があったからだ。梶本さんは「NZでは様々な新鮮な刺激を受けた。オーガニック酪農やハーブの利用、動物福祉などだ。また、飼養管理での生産性や搾乳の効率性の観点から学ぶべきことが多かった」と研修成果を語る。今後の経営にどう活かされるのか楽しみだ。

更に新たな転機が来たのは昨年末。市内の酪農家が急に廃業が決定。梶本さんが引き継ぐことになった。12月15日より二週間かけて引き継ぎ、1月1日より完全に引き継いだ。以前の借牛舎からの12頭と今回の離農農家の搾乳牛18頭をそのまま購入して計30頭の飼養規模となった。父親に預託している育成牛も分娩前になればこちらの牛舎に引き上げる予定だ。TMRは飼料代は要するが、飼料調整作業が最小限で給与も容易なので作業時間も節減出来る。引き継いだ成牛舎は2棟に分かれている。搾乳はパイプライン方式、飼料給与の省力化のためTMRにトップドレスのための濃厚飼料の自動

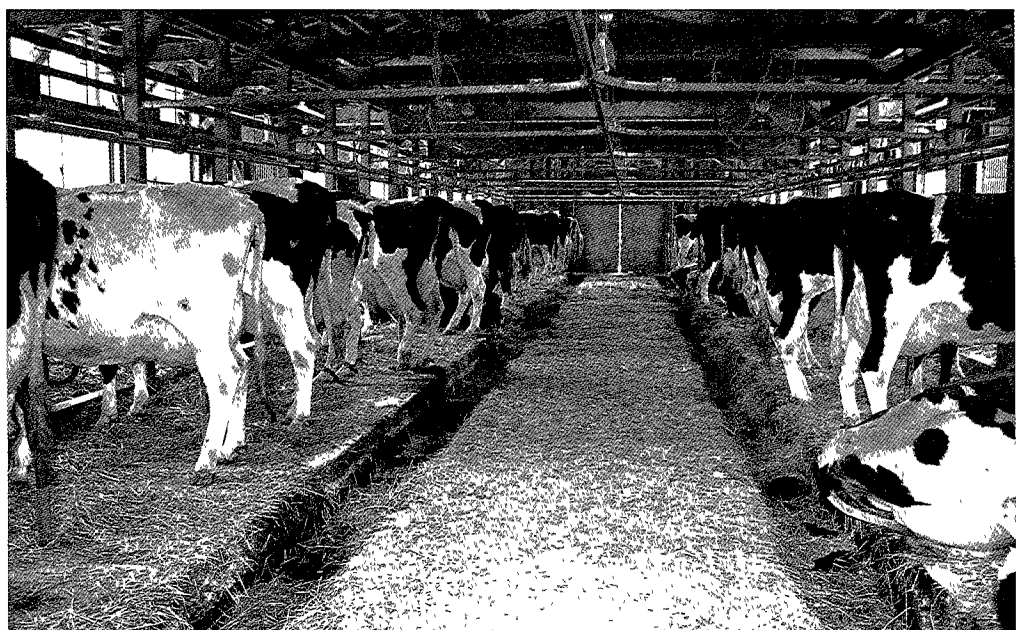


TMRセンター(岩手山麓デイリーサポート)

給餌機もある。奥さんが昨年に出産したこともあり、搾乳作業等が多忙となり、梶本さんは専任ヘルパーを退職した。ただサブヘルパーとして登録している。就農の方式は、居抜き継承で引き継いだのは牛舎2棟と敷地、事務棟、車庫、乳牛18頭、農機具など。住宅は無く通勤酪農だ。就農資金は、JA新いわてを通じて制度資金からの借入を申請中だ。

梶本希さんは「絶対に酪農家になるとの強い気持ちを持ち続けたのが、就農実現に結びついた。今の経営環境は自給飼料作りや糞尿処理に煩わされず、労働力を牛の管理に集中できることや、臨時ヘルパーなど外部からの作業受託による収入も期待できる。アウトソーシングによる作業の効率化と集中化による、クオリティの追及という新しいタイプの新規就農として、自分なりのユニークな経営展開を図りたい」と語る。

また、これから、新規就農を考えている人に対しては「やりたいと思ったときがやる時」と助言している。



現在牛舎2棟に搾乳牛が32頭

普通のOLから、 酪農ヘルパーで人生を変える。

◆群馬県の小林佳奈子さん酪農の夢実現

サラリーマン家庭に生まれ育った若い女性が普通のOL生活から一念発起、牛との触れあいの生活を目指す。北海道での目の回るような酪農家実習を終えて郷里での女性酪農ヘルパー生活を送り、やがて地元の酪農家と結ばれ、今では子供にも恵まれ憧れの酪農家生活を送っている。その体験を「第39回全国酪農青年女性酪農発表大会」で発表した群馬県太田市の小林佳奈子さん(37)には特別賞として「酪農ヘルパー夢大賞」が佐野宏哉会長から授与された。(社)酪農ヘルパー全国協会では酪農ヘルパーの就農促進のため今後も奨励策を講じたいとしている。

● OLから酪農ヘルパーへ、ポスターを見て決心

小林(旧姓新井)佳奈さんは群馬県太田市内の普通のサラリーマン家庭に生まれた。隣町の高校を卒業後は埼玉県熊谷市の短大へ進学。太田市の民間会社へ就職。OL生活をおくるなかで“自分の人生はこれで良いのか、一度きりの人生、自分のやりたい事をやろう”と思ったという。8年間のOL生活を辞めたのは28歳の時。もちろん両親や周囲は大反対。佳奈さんはハローワークへ相談、その時に「酪農を始めよう」のポスターを見て酪農ヘルパーを知ったという。酪農ヘルパーは牛乳が大好きな自分にぴったりの職業と直感、(社)酪農ヘルパー全国協会に酪農ヘルパー就農を相談、就農相談員から手厳しい言葉が返ってきたものの納得出来ず都内の全国協会へ直接相談した。佳奈さんの酪農ヘルパーへの熱意を聞いてすぐに北海道の牧場を紹介。この牧場は全国協会指定の酪農体験実習の牧場である。

北海道の牧場へは1週間の熟慮のうえ、反対する両親や友人を振り切って旅立ったのは平成12年8月末の夏の終わりだった。

7ヶ月間の酪農体験実習が終了後は地元の酪農ヘルパーとして働けることになった。

到着して挨拶もそこそこに着替えて直ぐに実習開始。乳牛に接したのはこのときが初めてで、乳牛の身体や乳房について、あれこれ作業内容の説明を受けて無我夢中になって作業についていくのがやっとだったという。緊張の余り、馴れない仕事で失敗の連続と生活環境の激変で1週間も



小林好一・佳奈子さん夫妻と長男亮太君

すると、疲労困憊と秋の風とホームシックもあり、朝早く牛舎へ行くのがイヤになったという。

そんな時、“自分はなんのために北海道に来たのか、酪農ヘルパーになる夢を実現するために来たのだ。皆の声を振り切って背水の陣で来たのだから、もう帰れない”と自分自身に言い聞かせて、やる気に切り替えたという。日に日に気温が低下し朝起きるのが、辛い日にも他の実習生2名の誰よりも頑張れるようになった。1ヶ月もすると仕事の内容も理解でき身体も馴れた。実習期間中に教えて貰った乳牛飼養のポイントは、今でも酪農経営の指針として十分に活かされている。降雪が積雪となり、作業が少し暇になった時に牧場の方から「これから酪農ヘルパーをやるのなら大型農機の免許を取得しておいた方が良い」と助言を受けて実習中に免許を取得しました。冬から春の雪解けを迎え、やがて約束の実習期間が終了。郷里の東毛酪農協の酪農ヘルパー職員に就職しました。東毛酪農協の牛乳は学校給食でも馴染んでいたもので、その酪農家さんの乳牛の酪農ヘルパーとして働くのは大変嬉しく思いました。また、両親も喜んでくれて目の回るような北海道での実習を新しい職場で活かすことができると思いました。

● 酪農ヘルパーから酪農家の妻へ

東毛酪農協でのヘルパー業務は、北海道実習で搾乳技術や飼養管理を学び経験して来たので自信を持っていましたが、組合内の酪農家でのやり方がそれぞれ異なり途惑いました。その時、酪農ヘルパー利用組合の副組合長をやっていた小林好一(52)さんが、よく私の悩みの相談に乗ってくれたのです。小林さんの両親(83)は昭和24年の戦後開拓で入植。鎌と鍬で現在地を開墾して大変に苦勞して酪農を始めていました。好一さんは長男で、体の弱い父親を助けるため、中学校の頃から搾乳の仕事を中心に手伝っていました。高校を卒業後自然と就農し、酪農家の道を歩み始めました。60歳になった父親が引退し、30歳で経営を移譲されました。母親が補助してくれていましたが、実質一人で酪農経営をやっていたのです。経営規模は繋ぎ牛舎、対尻式に搾乳牛30頭、育成牛15頭を飼養、草地面積5ha、平均乳量8500kg、乳脂肪4%。真面目で無理して高泌乳を狙わず、繁殖も順調で、乳質は個人コンクールの上位入賞者だ。利根川河川敷の収穫作業機械や、大型・中型トラクターも整備されている。

やがて、お互いに結婚を意識して交際。これからの酪農経営について話し合いをした。その結果「経営規模はこのままでやりたい。河川敷の粗飼料の利用を増やして自給割合を高めたい。出来れば初妊牛の販売をしたい」などと話し合った。酪農ヘルパーへ就労してから1年ほどで小林好一さんと結婚。佳奈子さんは夢であった酪農家になる夢を実現させたのである。

結婚後は東毛酪農協の獣医師の勧めもあり「人工授精師」の資格を取得。講習には搾乳後に県畜産試験場へ毎日通い、今では直腸検査もやり人工授精を行っている。飼養管理が良いために発情も順調で受胎率も悪くないという。平成17年には待望の長男の亮太くん(3)が生まれ母親となった。両親が健在なので幼稚園が休みの時など、子供の世話を時々はお願しているのが助かるという。今後は子



第39回全国酪農青年女性酪農発表大会で特別賞「酪農ヘルパー夢大賞」の表彰を受けた小林佳奈子さん

供が大きくなり、家族旅行の機会や、両親の介護などで酪農ヘルパーを利用する場面が増える」だろうと語る。

小林好一・佳奈子さんの結婚と経営について、東毛酪農協の大久保克美組合長は「非農家出身で、酪農ヘルパー経験の佳奈子さんの存在は、消費者組織と積極的に交流を進める組合の立場から有りがたい。酪農や牛乳の魅力を消費者・生産者の双方の気持ちになって伝えてくれる。また、何事にもチャレンジする行動力は、婦人部「コスモス会」に活力を与えてくれるだろう。好一さんとの結婚で小林牧場は、さらに家族経営として堅実に発展する」と語る。



「酪農家女性懇談会」に出席した小林佳奈子さん(向かい側右端)

《酪農ヘルパー事業と東毛酪農協》

東毛酪農協同組合(大久保克美組合長)と酪農ヘルパー制度創設とは因縁が深い関係にある。東毛酪農協が全国に先駆けて酪農ヘルパー事業の導入は昭和43年。組合では酪農家での多頭化を図るには、酪農ヘルパー制度導入により「酪農家に休日を」「楽しい酪農」をキャッチフレーズに、酪農家のヘルパー制度加入と多頭化を推進した。東毛酪農協の酪農ヘルパー事業や制度導入がモデルとなって、今日の酪農ヘルパー助成事業や全国協会の創立に結びついた。当時、組合の酪農ヘルパー制度の創設・運営に係わった関戸薫司専務は「東毛酪農協の故根岸孝組合長はその後、全酪連の副会長等の要職を務められ、酪農家が多頭化すると、周年労働が問題として、全酪連の故大坪会長を先頭に農水省に全国的な酪農ヘルパー制度の創設と助成を陳情しました。当初は何故、酪農家だけにヘルパーが必要なのか、行政からは理解されませんでした。当組合の酪農ヘルパー制度の運営実態を制度創設には参考にして貰った」と語る。

現在の組合の酪農ヘルパー事業は男女の酪農ヘルパー専任職員2名と酪農後継者が臨時ヘルパー要員として登録されており、生産課職員も緊急時には酪農ヘルパー要員として派遣される体制となっている。平成20年度の実績の利用組合員は37戸、年間の稼働回数は605回、1戸平均の年間の利用回数は218回となっている。ヘルパー利用は希望日利用型で2ヶ月前に利用組合で利用申し込みを調整のうえ決定される。酪農ヘルパーの身分は酪農協の技術職員であり、利用組合の運営経費等にも酪農協は支援しており、太田市からも補助金が交付されている。

府県のサラリーマンの息子が 酪農に憧れた。

◆武藤智昭・奈知子さん（北海道浜中町厚陽）

武 藤智昭さん（39）は茨城県のサラリーマンの家庭に生まれた。地元の工業高校時代の夏休みに、北海道浜中町に酪農家に援農アルバイトに来たのが縁の始まりだった。その時の経験や酪農の印象から、都会のサラリーマン生活より、将来は自然や家畜に触れ合う生活が自分の体力を活かせ、性格的にも合うと思ったという。

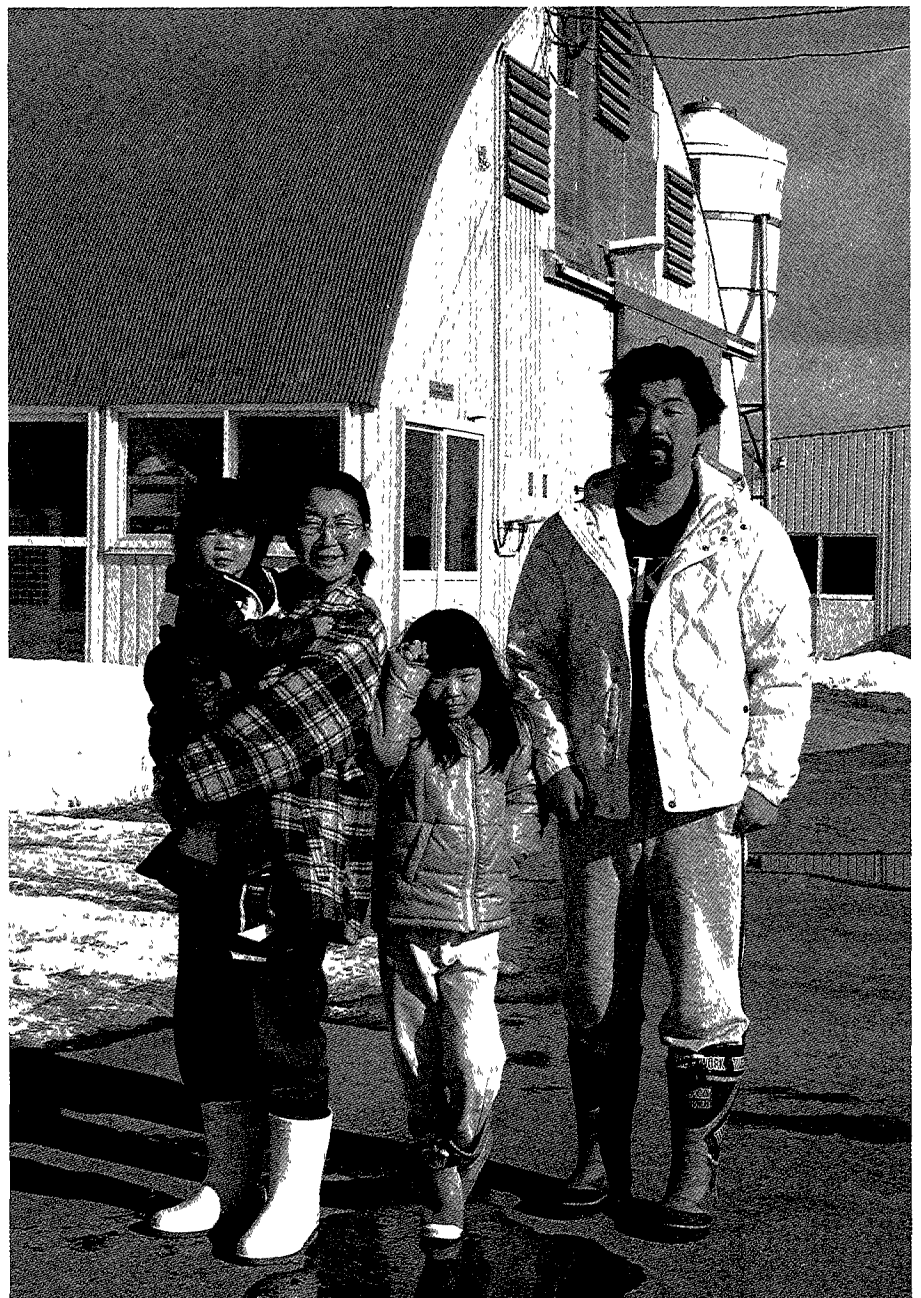
工業高校を卒業後、浜中町の牧場でアルバイト。その後同地区の牧場で2年間実習生活を送った後、故郷の茨城にもどり、競走馬の調教などサラリーマン生活を送っていたが北海道での酪農経験を思い出した。そして酪農に関わる仕事をしたい夢が募り退職、北海道で就労することに両親は特に反対もしなかったが、まさか、その後北海道で新規就農するとはまでは思っていなかったという。

●農場リースを活用し、浜中町で新規就農

再び北海道に渡り、浜中町農協の酪農ヘルパー利用組合の職員として5年間、その頃は地元の人達に武藤さんの寡黙で誠実な人柄も判り信頼感も高まった。地元出身の奈知子さんと出会い結婚。32歳の時に長女まなかちゃんも生まれた。その頃地元へ新規就農して酪農家になりたいと浜中町農協へと意思表示した。

やがて酪農後継者の居ない牧場に農場リース事業を利用して新規就農したのが平成18年12月であった。幸いなことに就農地域の酪農家には新規就農家が多いのが心強かったという。また、浜中町農業協同組合では、

経営面は営農相談係、技術面は営農コンサル室（技術センター含む）という支援体制をとっているが、農協の他の部署や、町、共済、普及センターなど、町全体でもさまざまな支援をおこなっている。



武藤智昭・奈知子さん夫妻と長女まなかちゃん、長男の匠馬ちゃん



トラクターは3台所有

● 放牧を取り入れた草地型酪農

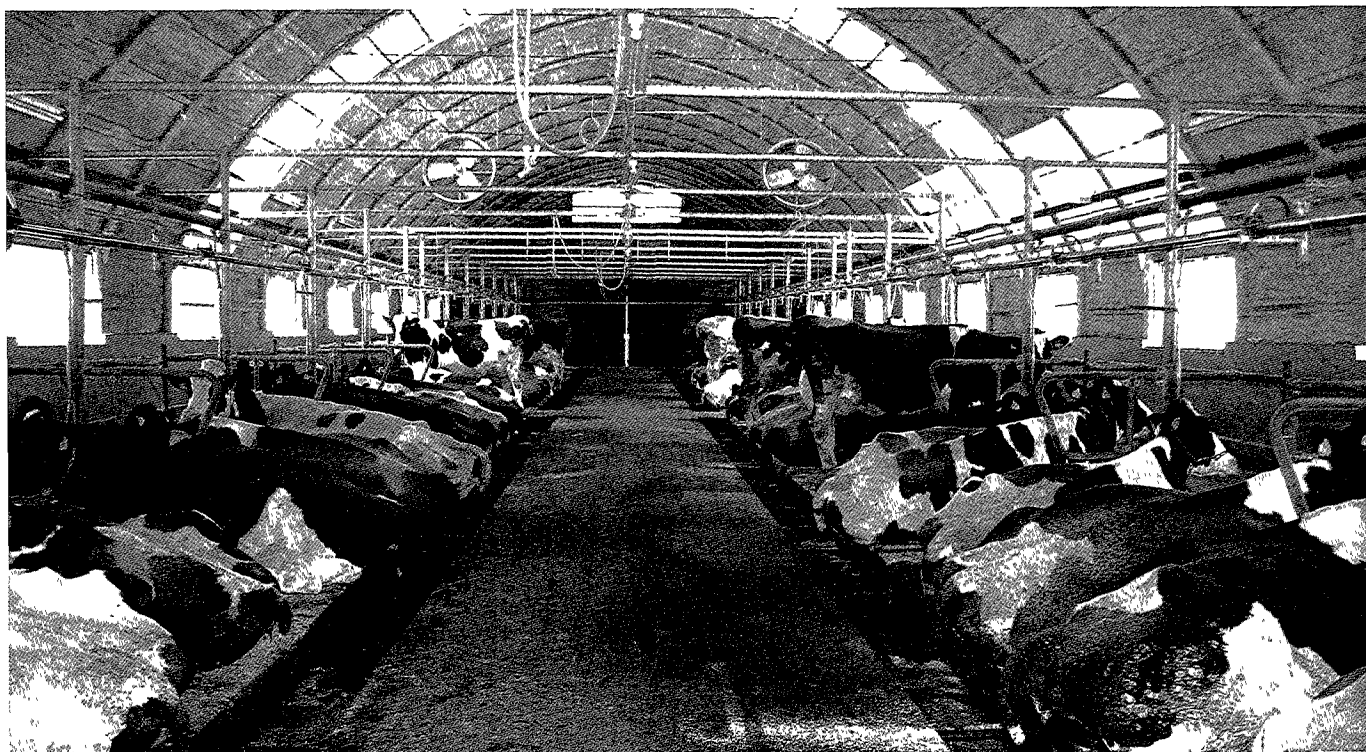
就農資金は自己資金のほか就農支援資金と農場リース事業で牛舎施設、倉庫2棟、乳牛、農業機械等は取得した。経営の規模は経産牛頭数は44頭、育成牛は20頭で育成牛は農協へ預託しているので管理面で助かっている。牛舎は未だ新しくタイストール飼養。搾乳はパイプライン方式で年間で403トンを生産している。牛群検定に加入しており経産牛1頭当たり8,300kg。飼料畑は59畝なのでトラクター3台、作業機7台で、乾草やサイレージ生産などに放牧を取り入れた草地型酪農経営でやっている。

今後の経営の方向としては、リース資金償還もやがて始まるので、経営のロスを少なくして経営内容の充実化を図

りたい。草地の一部に水はけが悪いところがあるので暗渠排水して草地の生産性を高めたいと考えている。

また、酪農ヘルパーの利用により、長男の匠馬ちゃんが幼いので、大きくなれば親子の思い出を作ってあげたいと語る。郷里の両親も、次男が北海道で就農すると聞いて最初はダメされるのではないかと心配していたそうだが、最近は孫たちの顔を見に訪れ、自然に溢れた浜中での生活を楽しんで行くという。

酪農ヘルパーで新規就農を迷っている若者へのメッセージとして「酪農は面白い、チャンスと思ったら決断してやってみたら良い。やれば何とかなる」とエールを送っている。



現在牛舎1棟に搾乳牛が44頭

酪農は面白い!

やればやるほどウシが応えてくれる。

◆野間一輝・直美牧場(北海道浜中町円朱別)

● 経営ノウハウ習得にはヘルパーが最適

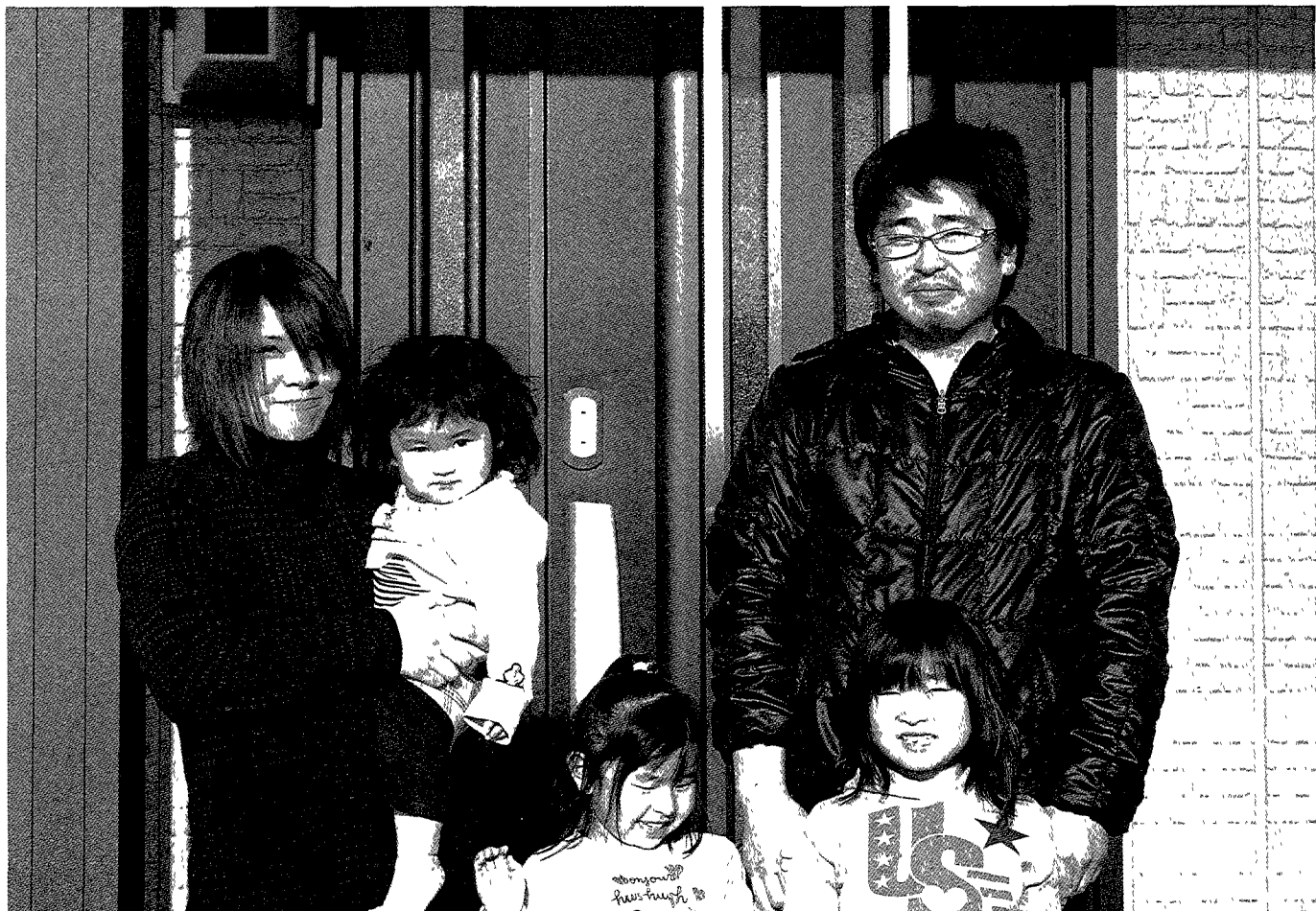
野 間一輝さん(28)は名古屋生まれで、名古屋育ち。酪農とは何の関係もないサラリーマン家庭の長男として育った。小さい頃から自然との触れあいや、生き物に興味があったという。高校時代にアルバイト感覚と観光気分の興味半分で北海道の酪農家へアルバイト実習に応募したのが、奥さんの直美さんとの結婚と、新規就農のキッカケとなったと笑う。高校卒業後は躊躇せずに根室の酪農家の酪農実習生として住み込み、酪農技術を習得していた。名古屋育ちの明るくて行動的な性格なので、同じような酪農関係の友人も沢山でき、交流も深めた。友人たちと情報交換や酪農談

義を行うなか「他の酪農経営や酪農技術を体験してみたい。もっと技術を向上させたいと痛切に感じた」という。「それには様々な酪農経営ノウハウを習得できる酪農ヘルパーが最適の職業と思った」という。

友人からの情報で浜中町酪農ヘルパー利用組合が酪農ヘルパー要員を募集していると聞いて、勤めていた牧場の実習生を辞めて酪農ヘルパー要員として浜中町へ就農した。

浜中町で酪農ヘルパーとして働き始めたころ、同じ職場で働いていた浅井直美さん(28)と出会うことになる。直美さんは町内の浅井牧場の生まれで、実家は長男が跡を継いだため町内の酪農ヘルパー利用組合に勤めていたのだった。

直美さんは小さい頃から牛が好きでアメリカでの酪農研



野間一輝・直美さん夫妻と長女の星莉那(せりな)ちゃん、次女の空恋羽(くれは)ちゃん、三女の来依叶(らいか)ちゃん



牧場にて

修も経験しており、酪農に関係のある仕事をしたいと思っていたという。その時、同じ職場の一輝さんと出会って、たちまち意気投合して結婚。平成16年には長女の星莉那(せりな)ちゃん(6)が誕生。翌年には次女の空恋羽(くれは)ちゃん(4)も誕生した。平成20年秋の新規就農にあたって、牧場の隣に新築した住宅で、昨年生まれた三女の来依叶(らいか)ちゃん(1)を交えた賑やかな女系家族に囲まれた楽しい酪農生活を送っている。

● 酪農ヘルパーから経営者へ

野間夫婦に就農機会が訪れたのは、直美さんの実家の長兄が病気になり酪農廃業の危機になったことだ。その頃は酪農ヘルパーをやり、経験を重ねるうちに一輝さんは「何時かは、機会があれば、自分でも酪農をやりたい気持ちになっていた」と語る。そこで野間さんと直美さんの実家である浅井牧場は、農協を交え双方で話し合いを行い、複雑な思いはあったものの、浅井牧場を引き継ぐ形ではなく、一度完全に清算し牧場としては閉場した上で、農場リース事業を利用して新たに野間牧場として出発したのである。

飼養形態はつなぎ牛舎にスタンション、搾乳はパイプラ

インミルクカー、倉庫3棟、トラクター3台と作業機7台。草地面積は60%で利用法は採草地44%、放牧地8%、採草・放牧兼用地8%。施設等の資金は就農支援資金と農場リース事業を利用した。

経営は草地型酪農経営で放牧主体の牛に優しいシンプルな酪農経営を目指すという。現在の経産牛頭数は48頭、育成牛21頭、生乳生産量は399ト。

今後の経営方針は「ヒト、牛、機械の事故・負担を少なく、無理のない低投入型の経営を目指したい。50歳までに借金返済して後はノンビリ遊びたい、しばらくは努力の時と思い頑張っている」と明るく語る。酪農ヘルパーの利用は、名古屋の実家へ家族で帰省した時に5日間利用しただけだが、娘が大きくなればヘルパー利用も増えると思っている。酪農ヘルパーへのメッセージは「酪農はウシを扱うので365日、時間に追われる仕事です。ゆっくりと遊びや買い物ができないなど大変な事も多いが、考え方や仕事の仕方では365日休みのようなものだ。やればやるほどウシが応えて自分に(利益が)返ってくる。とても面白い商売です。是非、酪農にチャレンジしてみて!」と新規就農希望者へエールを送る。

酪農経営を円滑に継承するための 酪農経営継承データベースに登録しましょう



酪農への新規就農希望者が増えていますが、就農先を探そうとしても、その探し方が分からないという声があります。一方、経営移譲希望者（共同経営希望者も含む）も、新規就農希望者を探しています。このため、全国的に新規就農希望者と経営移譲希望者の情報を収集し、データベースに登録して、必要な方に情報提供し、円滑な経営継承を促進します。

新規就農希望者

酪農に新規就農したいが、農場が見つからない。

経営移譲希望者

後継者がいないので農場・経営を第三者に譲りたい。

お近くの酪農ヘルパー利用組合・都道府県団体の
経営継承データベース推進担当者に相談。
新規就農希望者データベースに登録／経営移譲希望者データベースに登録

経営移譲したい方は、社団法人酪農ヘルパー全国協会のホームページの
新規就農希望者データベースから、新規就農希望者は、
経営移譲希望者データベースから、それぞれ条件の合いそうな方を検索。
(全国協会 <http://d-helpar.lin.gr.jp/>)

条件の合う方が見つければ、経営継承データベース推進担当者を通じて、
詳しい情報を入手。

相手の方にあって、直接、経営継承に関する交渉の実施。
(経営継承データベース推進担当者が仲介)

経営継承の実現（就農）

牛に優しい 仕事をしよう

全国で酪農ヘルパーを
募集しています。

酪農家の皆さんが休みをとる際に、酪農家になって搾乳や飼料給与などの仕事をするのが酪農ヘルパーです。全国各地にある利用組合等で、今日も酪農ヘルパーを募集しています。

酪農ヘルパーになるために
支援しています。

酪農ヘルパー全国協会は、酪農ヘルパー就業希望者で修学資金の受給を希望する農業大学等の学生に対し、修学資金（月額5万円を1年間を限度に）を交付します。また、酪農ヘルパー就業希望者で酪農体験希望者に対し、体験農場を斡旋しています。

技術を習得して新規就農に
挑戦しよう。

酪農ヘルパーは、さまざまな酪農経営をヘルパーしながら、酪農経営に必要な知識と技術を身につけるとともに、自分にあった経営スタイルを見つけるチャンスでもあります。あなたも、挑戦してみませんか。

いま全国で
酪農ヘルパーを
募集しています

今日も全国で
酪農ヘルパーが
活躍しています

人に優しく
自然に優しい

牛に優しい
人が好き

◆酪農ヘルパーについて詳しくは
下記ホームページにも掲載されています。
ぜひご覧ください。

酪農ヘルパー全国協会

検索

表紙の写真：仲間たちと近野牧場の看板をたちあげる近野一家(中央)と
R&Rおんねないの皆さん
裏表紙の写真：森口夫婦(左)から近野夫婦(右)へ

牧場経営の夢をかなえた酪農ヘルパーたち——第3集

発行日 平成22年3月15日
編集発行 社団法人 酪農ヘルパー全国協会

森口夫妻・近野夫妻 歓送迎会



築きあげてきた酪農を新規就農者が中継ぎ(Rlay)し、
新規就農者の夢を実現(Realization)しながら地域農業を継続し、
地域の活性化を図る。



R&Rおんねない

社団法人 酪農ヘルパー全国協会

〒103-0026 東京都中央区日本橋兜町6番7号 ヒューリック兜町ビル6階

TEL.03-3662-2722 FAX.03-3662-2723

URL:<http://d-helper.lin.gr.jp> e-mail:info@d-helper.lin.gr.jp